

私のささやかな
オーケストラ体験演劇集団 円 演出家
こもりみみ
小森美巳

小森昭宏・美巳ご夫妻

東京フィルのゆかりの方々に、クラシック音楽に魅了されたきっかけや音楽生活について綴っていただく本連載。第11回は、NHK子ども番組「おかあさんといっしょ」放送開始時のプロデューサーはじめ長く演出家として活動されてきた個人賛助会員の小森美巳様。作曲家で東京フィルの理事でもあり2016年に逝去された故・小森昭宏氏の夫人であり、東京フィル副理事長の黒柳徹子とも長く交流があるそうです。

小学校1年生になった頃、同級生のお父さんがオーケストラでティンパニを叩いていたので、度々演奏会に連れていってもらった。聴くというより観ることが楽しい時代だった。その後私は父の転勤であちこち引越。最後は朝鮮(今の韓国)の大邱(テグ)に暮して約2年、終戦による引き揚げで、ようやく東京に帰り着いた時には中学生になっていた。

“欲しがりません勝つまでは!”の時間を経て、焼野原からすべてが立ち上った、追いつけ追い越せの時代、あらゆる意味で文化的には貧しかったと思う。演劇漬けの学生時代を終え、放送の仕事に就いてからは、様々な音楽に出会い、たくさんの歌やドラマを創ったが、オーケストラコンサートからは遠かった。

あの同級生の兄貴と結婚して、ティンパニのお父さん(小森宗太郎)は義理の父になった。相手が作曲家だったので一緒に行くようになったオーケストラの世界は、洗練されていて、いささか敷居が高かったが、ようやく参加できた感があった。

小森はチョン・ミョンフン指揮のマーラー曲がご最良だったが、私はドラマティックなものが好きで、ここ数年間のベストワンは2016年7月の『蝶々夫人』だ。韓国のソプラノ、ヴィットリア・イエオさんの主演。この日

は演奏会形式で字幕付き、下手側に小さい舞台が作られていた。終幕、蝶々さんがたったひとつの衣裳である打ち掛姿で、怒り、悲しみを演じ、この日は登場していない我が子を抱きしめるように歌うクライマックスに胸を打たれた。指揮者の全体を包み込むような余裕と、歌い手とのアンサンブルの良さは格別で、客席の1人として大感動だった。

主人亡きあと、初めて1人で聴いたコンサートでもあった。

このひと月前、長岡での東京フィルコンサートは音楽物語『窓ぎわのトットちゃん』だった。当日、作者で語り手の黒柳さんから、作曲者小森の携帯にメールがあった。「一緒に来られなくて残念、でも数え切れない程のアンコールで本当に大盛会だったことお知らせします」と。

ほんの少しの時間差で本人はこのメールを見ることが叶わなかった。

音楽物語『窓ぎわのトットちゃん』は、ベストセラーになった黒柳さんの自伝をそのままに作曲されていて、全編に徹子さんの現在につながる人生のエッセンスが溢れている。又、同じ時代を生きた作曲者の感情や思想も重なっている。

そして私にとっては、最も身近かで大切なオーケストラ曲となった。

子どもが成長する時、戦争の体験がどんなものであったかを、この物語は音楽の力と共に強く感じさせてくれると思う。

今年8月15日のハートフルコンサートで、トットちゃんの黒柳さんは、きっと“平和”の話をされるだろう。コロナに加えて毎日の戦争のニュース、溜息が止まらないこの頃だが、音楽の力で、先ず人間の心の中から平和になりますようにと、祈らずにはられない。

小森美巳(こもりみみ) / 1933年東京生まれ。1955年日本女子大学文学部卒。NHK入局、主としてTV「おかあさんといっしょ」ブーフーウー・おはなしの森「うたのえほん」等担当。1970年NHK退職、1980年から岸田今日子企画、演劇集団円・こどもステージに谷川俊太郎氏と共に参加、演出を担当。音楽に小森昭宏を加え、現在に至る。小森昭宏との仕事として、川本喜八郎の人形劇「三国志」、日生オペラシリーズ 能・狂言の現代語訳「羽衣」「くさびら」「うつぼ猿」、音楽物語「大砲の中のアヒル」「にじ色のしまうま」「スイミー」、音楽劇「まどさんのまど」「どうぞのいす」、コンサート「まどみちおの世界」「真理ヨシコ コンサート」「小森昭宏 コンサート」。現在、演劇集団円・演出部所属。演出家。2022年「小森昭宏作品集」を出版。2022年夏、岸田今日子企画 円・こどもステージNo.40「キレイちゃんとかたもの」を演出予定。

<http://www.en21.co.jp/index.html>



1982年、音楽物語『窓ぎわのトットちゃん』初演時の舞台より